

小山作之助生誕160周年記念

小山作之助顕彰
事業報告書



「日本音楽教育の母」小山作之助顕彰事業実行委員会

(小山作之助160周年記念事業実行委員会)

目 次

はじめに 小山作之助生誕160周年記念事業について	1
1 「生誕160周年記念 冊子」(リーフレット)の制作と配付	2
2 作之助の作品	3～11
(1) 『資料収集報告書 夏は来ぬ』25～28頁掲載分(一部加筆修正)	3～6
(2) 新たに確認した楽曲	6～7
(3) 校歌及び史料など	7～11
① 作曲した校歌(現在確認分)	7
② 長野県立飯田風越高校(飯田高等女学校)校歌と作之助の書簡	8～9
③ 長野県松本市立開智小学校校歌	10
④ 長岡市立四郎丸小学校校歌	10
⑤ 東頸城郡安塚町立中川小学校(現在の上越市安塚区安塚小学校に統合)校歌	11
3 新たに確認したこと	12～20
(1) 故郷とのつながり	12～16
① 絵はがきの発見(米沢の上杉神社から潟町の親族へ)	12
② 昭和2年の帰郷	13
③ 文部省「尋常小学唱歌」の「海」について	13
④ 「潟町青年会(團)歌」について	14～16
(2) 晩年の活躍	17～20
① 日本楽器製造株式会社(現:ヤマハ株)における活躍	17～18
② 雑誌『音楽グラフ』の編集・出版	19
③ 私立音楽学校への援助	19
④ 小山作之助の急逝	20
4 今後に向けて	21～22
(1) 新たな調査について	21
(2) 調査・研究の課題	22
(3) 資料収集活動と研究調査活動のまとめ	22
おわりに	23
令和6年度 事業実績(小山作之助生誕160周年記念事業実行委員会)	24～26
令和7年度 事業実績(「日本音楽教育の母」小山作之助顕彰事業実行委員会)	27～28
今後の活動について、お世話になった機関や施設名一覧	29

はじめに

小山作之助生誕160周年記念事業について

令和6(2024)年度、小山作之助生誕160周年を記念して、様々な事業が企画されました。その内容の1つは、小山作之助関連資料の収集と調査・研究活動の再開、その成果を紹介する記念フェスタ当日のパネル展示です。

資料収集の活動は、大潟町時代の平成13(2001)年に「小山作之助資料収集委員会設置要綱」が定められ、収集委員の委嘱により収集事業が開始されました。その成果は、生誕140周年記念事業として、平成16(2004)年12月に『資料収集報告書 夏は来ぬ』にまとめられました。その内容は作之助の生涯を網羅し、東京音楽学校、伊澤修二、瀧廉太郎とのかかわり、その人柄やお孫さんから伺ったお話などを掲載しています。また、収集事業報告として、小山家から寄贈された「日記」、潟町公民館に保管されていた「潟町青年團歌」史料の発見、あわせて、作之助の未発見作品を含む162曲を紹介しています。そのとき収集した資料などは大潟コミュニティプラザ2階に展示されています。

令和6(2024)年度、生誕160周年を契機として資料収集事業を再開しました。近年はインターネット環境が急速に進展し、資料探索の検索能力が向上、国立国会図書館をはじめ、各種研究施設などによる所蔵資料のデータ配信も増加し、調査・収集活動を助けています。また、ユーチューブなどの配信音源が曲の確認に大きな力を発揮します。今回のパネル展示にむけて、これらの情報が大きな原動力となりました。特に、校歌を含む163曲目から216曲までの作品の新発見、日本楽器製造株式会社(現:ヤマハ(株))に関する資料などに、その成果の一端があらわれています。

パネル展示は、(1)先生の略歴と作品、(2)校歌の紹介、(3)故郷とのつながり、(4)晩年の活躍、の4つの分野で紹介しました。その内容は平成16(2004)年12月の『資料収集報告書 夏は来ぬ』を補完するものです。なお、今回の報告書は、このパネル展示原稿をもとに資料収集関係のページを構成しています。

一方、生誕160周年事業イベントとして、まず令和6(2024)年7月15日に生誕160周年記念第20回卯の花音楽祭が行われました。そして、最も大きなイベントは令和7(2025)年2月23日「小山作之助 生誕160周年記念フェスタ」(会場:大潟区コミュニティプラザ)の開催でした。内容は、杉田玄氏の講演、後藤丹氏による楽曲解説、梅澤ゆきの氏によるソプラノ独唱(ピアノ高橋雅代氏)、地元合唱団の発表が行われました。ソプラノ独唱では「秋景色」と「夏は来ぬ」、コーラスおおがたは「漁業の歌」、「鏡が浦の驟雨」、「海」を、潟町町内会「潟町青年團歌」と作之助の作品が歌われました。

記念事業は、そのほかにも「小山作之助」パンフレットを制作して区内全戸に配付、令和6(2024)年7月22日には大潟町小・中学校で「小山作之助生誕160周年献立」(ごはん、牛乳(ココアの素)、カツレツ、かっぱサラダ、卯の花汁)の給食実施、まちづくり大潟による関連ホームページ作成と下記の音源配信等が行われました。

(動画)①夏は来ぬ、②潟町青年團歌、③旧安塚町立中川小学校歌、④漁業の歌、⑤長岡市立四郎丸小学校歌、⑥小山作之助物語
(音源)①鏡が浦の驟雨、②川中島、③秋景色、④吉野山

また、この記念事業の一部は令和7(2025)年度までの継続となりました。これにより資料収集事業は継続となり、調査活動の補足、報告会の実施(大潟地区公民館講座「ふるさと散歩道」12月3日)を行いました。また、卯の花の苗木育成をはかる活動等が行われました。

この調査報告書は、小山作之助生誕160周年に伴う顕彰事業の2年間の活動を網羅・概観した内容になっています。

ぜひご覧いただき、郷土の偉人小山作之助に関する知識を深め、さらなる興味・関心を高めていただきたいと思います。

令和8年3月

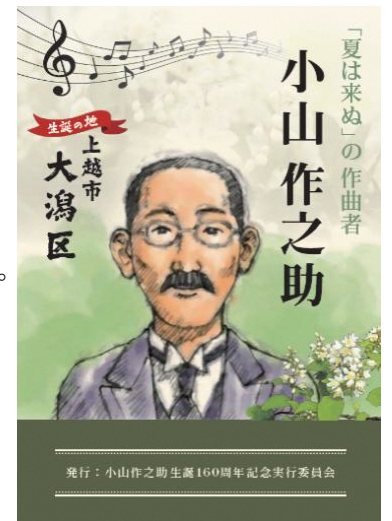
「日本音楽教育の母」小山作之助顕彰事業実行委員会
(小山作之助160周年記念事業実行委員会)

1 「生誕160周年記念 冊子」(リーフレット)の制作と配付

【小山作之助年譜】

1864年(文久3年)	1月19日越後国潟町村に生まれる。(※西暦と誕生日は新暦で表記)
1878年(明治11年)	潟町小学校を卒業後、2年間、高田藩士小島堅吉の塾で漢学を学ぶ。
1880年(明治13年)	上京し、大学予備門に入学。
1881年(明治14年)	明治学院大学の前身、築地大学校に入学。
1883年(明治16年)	東京音楽学校の前身、文部省音楽取調掛に入学。
1887年(明治20年)	音楽取調掛卒業(総代)。
1888年(明治21年)	東京府尋常師範学校の助教諭となる。
1890年(明治23年)	東京府尋常師範学校教諭兼尋常中学校教諭となる。
1891年(明治24年)	初めての作曲集「国民唱歌集」を発表。
1892年(明治25年)	東京音楽学校(現:東京芸術大学)助教授となる。
1897年(明治30年)	東京音楽学校教授となる。
1904年(明治37年)	日本楽器製造株式会社(現:ヤマハ㈱)の顧問に就任。
1909年(明治42年)	小学校唱歌教科書編纂委員となる。
1918年(大正7年)	小学校唱歌作曲委員となる。
1923年(大正12年)	日本教育音楽協会初代会長に就任する。
1925年(大正14年)	月刊雑誌「音楽グラフ」社長に就任。
1927年(昭和2年)	6月27日、病により急逝。享年65歳。

表紙



作之助ってどんな人?

故郷を離れ音楽の道へ



作之助は、1864(文久3)年に潟町村に生まれました。1880(明治13)年に上京し、やがて音楽の道を志し、東京音楽学校(現 東京芸術大学)の前身である文部省音楽取調掛に進み、音楽について一生懸命学びました。

日本音楽教育の母として



1887(明治20)年に文部省音楽取調掛を卒業後、作之助は音楽教師になります。作曲活動を続ける一方で、音楽教師の育成や音楽教育の必要性も熱心に説いたことから「日本音楽教育の母」といわれるようになりました。教え子には、滝廉太郎がいます。

モダンなセンスを取り入れた作曲家として



作之助は代表作の「夏は来ぬ」のほか「漁業の歌」など、生涯で手がけた曲は1,000曲以上といわれています。作之助の作品には、日本古来の音楽を大切にしながらも、西洋音楽の優れた要素を導入して取り入れるなど、新しい感覚と工夫で作られた曲が多くあります。

音楽関連に多忙を極める



1903(明治36)年に音楽学校を退職した後には、文部省の仕事や、日本楽器(現 ヤマハ株式会社)の顧問に就任し、日本製楽器の普及に尽力しました。また、東京高等音楽学院(現 国立音楽大学)などの設立に関与しました。多忙な日々を過ごすなか、1927(昭和2)年に原稿執筆中に突然体調を崩し、65歳でこの世を去りました。

作之助の楽曲

代表曲

「夏は来ぬ」

作之助が作曲した曲で最も有名な曲です。平成19年に発表された「日本の歌百選」にも選出されており、世代を問わず親しまれています。また、令和7年3月に開業10周年を迎える北陸新幹線「上越妙高駅」の発車メロデーに採用されています。



ふるさとに捧げた曲

「潟町青年團歌」

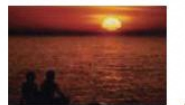
作之助が糸魚川市出身の相馬御風とともに、潟町青年会の依頼に応じて作った曲です。「大変良い曲なので 軽々しく歌ってはならない」というメッセージが青年会に届いたといわれています。(御風の歌詞原案は「潟町青年團歌」でしたが、「潟町青年会歌」と改題して歌われました。)写真は潟町内会所蔵の作之助直筆の楽譜です。



文部省唱歌の名曲

「海」

「夏は来ぬ」「漁業の歌」はよく知られていますが、「松原遠く…」の歌詞で知られる「海」は文部省編さん「尋常小学唱歌」に作者不詳として掲載されています。この曲は作之助作詞・作曲という説があり、大潟町史で触れられています。



小山作之助を称える取り組み

大潟区では、各種団体が作之助を称える取り組みを行っています。

大潟町小・中学校での取り組み

生誕150周年を記念して発行した「小山作之助物語」を活用した学習や、音楽の授業などで「夏は来ぬ」を歌っています。児童・生徒は3番まで歌えるのだとか。「小山作之助物語」は図書館で読むことができます。

日本音楽教育の母

小山作之助物語



大潟小学校児童会での取り組み



卯の花音楽祭(卯の花音楽祭実行委員会)

作之助の功績を称え、毎年7月に「卯の花音楽祭」を開催しています。令和6年は作之助生誕160周年、第20回の節目の音楽祭となり、作之助が手がけた曲を中心に地元合唱団の歌声が響きました。また、今回初めて地元小学生を中心としたジュニア合唱団を結成しました。

第20回 卯の花音楽祭



このページは「生誕160周年記念 冊子」(リーフレット)からの引用・抜粋で構成しました。

2 作之助の作品

(1) 『資料収集報告書 夏は来ぬ』 25～28 頁掲載分（一部加筆修正）

	曲目	作詞	作曲	備考
1	ああ勇ましき広瀬中佐 戦雲くらき	武島 羽衣	小山 作之助	
2	愛国の歌	楓鹿 山人	本元子	
3	愛国唱歌 徳川時代	中村 秋香	小山 作之助	
4	青海原	鳥山 譲	小山 作之助	
5	東京品川区 青山小学校校歌	中村 秋香	小山 作之助	
6	秋景色		小山 作之助	『新撰国民唱歌』第三集 明治33年
7	浅草小学校校歌	大和田 建樹	小山 作之助	
8	朝日に匂ふ（祝出軍）	中村 秋香	小山 作之助	
9	飯田高等女学校	伊澤 修二	小山 作之助	長野県立飯田風越高校 HP音源あり
10	勇ましく 福島中佐単騎遠征	本元子		
11	勇ましく	本元子		
12	一月一日	稲垣 千穎	小山 作之助	
13	戒の歌	千家 尊福	小山 作之助	
14	衛生唱歌	糸 左近	小山 本元子	
15	逢坂山	小中村 義象	小山 作之助	
16	凱歌	鳥居 忱	小山 作之助	
17	海国大丈夫	大和田 建樹	小山 作之助	
18	海國男兒	大和田 建樹	本元子	
19	甲斐唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	
20	海戦	旗野 十一郎	本元子	
21	開智小学校校歌	浅井 洌	小山 作之助	長野県松本市 開智学校
22	鏡が浦の驟雨	渡邊 文雄	本元子	
23	学問	山田 美妙齋	小山 作之助	
24	檀原の宮	大和田 建樹	小山 作之助	
25	風烈しくとも	下田 歌子	小山 作之助	
26	肩なる銃	旗野 十一郎	小山 作之助	
27	湯町青年会歌	相馬 御風	小山 作之助	
28	加藤清正		小山 作之助	
29	枯野	無名氏	本元子	
30	神風	友田 宜剛	本元子	
31	神の擁護	中村 秋香	小山 作之助	
32	川中島	旗野 十一郎	小山 作之助	
33	勸学の歌	楓鹿 山人	本元子	
34	観兵式の歌	小田 深蔵	小山 作之助	
35	菅公の歌	中村 秋香	小山 作之助	
36	菊	旗野 十一郎	小山 作之助	
37	寄宿舎の古釣瓶	小池 友七	小山 作之助	
38	義勇奉公	旗野 十一郎	小山 作之助	
39	教育勅語唱歌	武島 又次郎	小山 作之助	
40	漁業の歌	中村 秋香	本元子	
41	黒髪櫛る	中島 長吉	小山 作之助	
42	軍艦戦闘 公に奉じて	無名氏		
43	軍人の子	大和田 建樹	小山 作之助	
44	訓の歌	千家 尊福	小山 作之助	
45	敬愛信義	千家 尊福	小山 作之助	
46	假粧の水	菊間 善清	小山 作之助	
47	舷舷相摩（暁月夜）	中村 秋香	小山 作之助	
48	工業の歌	大和田 建樹	小山 作之助	
49	公德唱歌 東京府民	大和田 建樹	小山 作之助	
50	孝の道	中村 秋香	小山 作之助	

51	国民教育忠勇唱歌 楠公父子	大和田 建樹	本元子	
52	狛（こまいぬ）の渡		小山 作之助	
53	さくら	本元子	本元子	
54	札幌中学校校歌	大和田 建樹	小山 作之助	現札幌南高校 明治38年
55	残雪	武島 又次郎	本元子	
56	慈愛の海（動物虐待防止の歌）	大和田 建樹	本元子	
57	兒訓	東宮 鐵眞呂	小山 作之助	
58	四十七士 会議の庭	大和田 建樹	本元子	
59	四十七士 刃の血	大和田 建樹	本元子	
60	四条躰	大和田 建樹	小山 作之助	
61	実業教育よーざん唱歌	練木 喜三	本元子	
62	西比利亚 地理唱歌	高須 治輔	本元子	
63	祝勝歌		本元子	
64	出陣	大和田 建樹	小山 作之助	
65	春郊打球		小山 作之助	
66	四郎丸小学校校歌	遠山 運平	小山 作之助	長岡市立四郎丸小
67	進撃	中村 秋香	小山 作之助	
68	親和中学校・親和女子高等学校校歌	佐藤八重子	小山 作之助	
69	雀と烏	小竹 生	本元子	
70	進め矢玉	中村 秋香	小山 作之助	
71	征露歌	白石鐵二郎ほか	小山 作之助	
72	斥候騎兵	中村 秋香	小山 作之助	
73	節儉慈善	千家 尊福	小山 作之助	
74	戦死者を弔う歌	黒川 眞一	小山 作之助	
75	戦闘歌	大和田 建樹	本元子	
76	千引の岩（義勇奉公 男生徒用）	大和田 建樹	小山 作之助	
77	千篇萬巻	中島 長吉	小山 作之助	
78	その水上	旗野 十一郎	小山 作之助	
79	体育唱歌	丸山 正彦	小山 作之助	
80	第一回旅順海戦（第一回旅順の攻撃か？）	佐々木信綱	小山 作之助	
81	大元帥陛下奉迎の歌	黒川 眞一	小山 作之助	
82	旅歌	無名氏	奥 好義	
83	玉	東 久世	小山 作之助	
84	小さき砂	大和田 建樹	小山 作之助	『新撰国民唱歌』
85	忠勇唱歌楠公父子（51とダブリか？）	大和田 建樹	本元子	
86	中和小学校校歌	中村 秋香	小山 作之助	東京都墨田区中和小 明治34年 H P
87	勅語奉答	中村 秋香	小山 作之助	
88	勅語奉答 勅語奉答の歌	勝 安房	小山 作之助	
89	地理教育東京唱歌 第1集	武島 又次郎	小山 作之助	
90	地理教育東京唱歌 第2集	武島 又次郎	小山 作之助	
91	地理摘要唱歌		小山 作之助	
92	地理歴史教育 甲斐唱歌	大和田 建樹	本元子	
93	地理歴史教育 東京名所唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	
94	敦賀唱歌		小山 作之助	
95	帝国議会開院の児歌	雪の舎主人作歌	小山 作之助	
96	敵は幾万	山田 美妙斎	小山 作之助	
97	天長節祝歌	物集 高見	小山 作之助	
98	東京市櫻川小学校校歌	佐々木信綱	小山 作之助	H6年港区御成門小に統合
99	東京名所唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	
100	東京名勝日曜遊び公園唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	

101	常盤小学校校歌	中村 秋香	小山 作之助	中央区常盤小 明治28年 H P
102	轟く筒音	少年団主人	小山 作之助	
103	虎狩	旗野 十一郎	小山 作之助	
104	鳥		小山 作之助	
105	中川小学校校歌	相馬 御風	小山 作之助	上越市安塚区
106	夏	無名氏	本元子	
107	夏は来ぬ	佐々木信綱	本元子	
108	夏は来ぬ	旗野 士良	本元子	
109	七重八重 (國法)	旗野 十一郎	小山 作之助	
110	成田幼稚園園歌	大和田 建樹	小山 作之助	
111	錦の御旗	中村 秋香	小山 作之助	
112	日章旗	山田 美妙齋	小山 作之助	
113	新田義貞朝臣	今井 清彦	小山 作之助	
114	日本海軍	大和田 建樹	本元子	
115	日本男子		小山 作之助	
116	日本文典唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	
117	熱成なる水兵	佐々木信綱	小山 作之助	
118	年中の歌	大和田 建樹	本元子	
119	昇る日 (國憲)	旗野 十一郎	小山 作之助	
120	八洲の民	稲垣 千穎	小山 作之助	
121	花の歌 花	大和田 建樹	本元子	
122	花の都	大和田 建樹	本元子	
123	番町小学校校歌「われらがかざせる」	中村 秋香	小山 作之助	東京都千代田区番町小旧校歌 明治35年 同窓会 H P
124	富士の高嶺	小幡 篤二郎	小山 作之助	
125	富士の高嶺	林 麿臣	本元子	
126	富士見小学校校歌	中村 秋香	小山 作之助	
127	二人の親	旗野 十一郎	小山 作之助	
128	冬	小田 みよし	本元子	
129	無禮振舞ふ	無名氏		
130	兵士来る	本元子	本元子	
131	兵士の告別	坂 正臣	小山 作之助	
132	兵士の歌	小山 作之助		
133	奉公	東宮 鐵眞呂	小山 作之助	
134	奉祝唱歌	中村 秋香	小山 作之助	
135	朋友	1番光国卿、2・3番不明	小山 作之助	
136	學びの力	中村 秋香	小山 作之助	
137	満州西比利亞地理唱歌		小山 作之助	
138	満州地理唱歌	高須 治輔	本元子	
139	水清く屍	阪 正臣	小山 作之助	
140	水沢小学校校歌	畠山 健	小山 作之助	奥州市立水沢小 明治35年 岩手県最古の校歌
141	道真卿	大和田 建樹	本元子	
142	南へ進む日の御旗	堀内 敬三	小山 作之助	『国民合唱』第三輯
143	八尺の瓊 (やさかのたま)	旗野 十一郎	小山 作之助	
144	八代大佐	福澤 悦三郎	小山 作之助	『戦時唱歌』第二編
145	弥彦山の歌	小山 作之助	小山 作之助	
146	大和男児	東宮 鐵眞呂	本元子	『幼年唱歌』
147	勇士	本元子	エフ・モーリング	
148	愉快	旗野 十一郎	小山 作之助	
149	雪つぶて	中村 秋香	小山 作之助	
150	吉田松陰	土井 林吉	小山 作之助	

151	吉野山	吉岡 郷甫	小山 作之助	
152	世のために		本元子	
153	喇叭卒（らっぱそつ）	旗野 十一郎	小山 作之助	
154	亂を忘れず	本居春庭、松平定信	小山 作之助	
155	陸戦 陸戦海戦（起きてやたてたて）	旗野 士良	本元子	
156	旅順の攻撃	佐々木信綱	小山 作之助	
157	旅順開城	尾上 八郎	小山 作之助	明治38年
158	歴史教育愛国唱歌	中村 秋香	小山 作之助	
159	露営の歌	福澤 悦三郎	小山 作之助	『戦時唱歌』第二編
160	我艦隊	無名氏	小山 作之助	
161	我国と音楽との関係を思ひて	小山 作之助	信時潔	
162	我身も家も（義勇奉公、女生徒用）	大和田 建樹	小山 作之助	

(2) 新たに確認した楽曲

163	あめつち		小山 作之助	『おもかげ』
164	愛国勸学	楓鹿 山人	本元子	『新撰国民唱歌』第三集
165	ああわからない節	添田亜蟬坊	小山 作之助	「日本海軍」替歌
166	エジプトを出たイスラエル	山崎 鷺男	小山 作之助	
167	親の恩		小山 作之助	『おもかげ』
168	親の心		小山 作之助	『おもかげ』
169	親の子		小山 作之助	『おもかげ』
170	大越中佐	友田 宜剛	小山 作之助	明治39年
171	大阪市の歌	一柳 安次郎	小山 作之助・山田源一郎	明治36年（1903年）
172	大皇国		小山 作之助	『おもかげ』
173	兄弟		小山 作之助	『おもかげ』
174	九州電気工学校校歌（現在の九州電気専門学校）	降矢 芳郎	小山 作之助	昭和5年制定 曲は四条畷
175	きるべし	湯本 武比古	小山 作之助	『日本軍歌』新編唱歌集 明治42年
176	国のみより		小山 作之助	『おもかげ』
177	訣別の歌	福澤 悦三郎	小山 作之助	『戦時唱歌』第一編
178	孝明天皇三十年祭遙拝式歌	福羽 美静	小山 作之助	明治30年
179	古戦場	中村 秋香	小山 作之助	『軍歌集 忠実勇武』
180	駒の蹄（ひづめ）		小山 作之助	中学唱歌
181	公園唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	1909年
182	海事教育 航海唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	明治33年
183	航空隊	東宮 鐵眞呂	小山 作之助	昭和4年 新撰中学唱歌（第1学年）
184	春夏秋冬 花鳥唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	宇和島東高校同窓会HP
185	進軍の曲	福澤 悦三郎	小山 作之助	『戦時唱歌』第一編
186	信州婦人	太田 水穂	小山 作之助	
187	菅公	東宮 鐵眞呂	小山 作之助	『日露戦争国民唱歌』
188	遷都三十年祝賀会行幸奉迎歌	黒川 眞頼	小山 作之助	明治31年
189	竹きり・地蔵さま		小山 作之助	第二次学習指導要領（s26）
190	大連小学校 共通校歌	大和田 建樹	小山 作之助	明治41年5月
191	忠孝文武		小山 作之助	『おもかげ』
192	つまらない節	松崎ただし	小山 作之助	
193	天孫降臨	大和田 建樹	小山 作之助	『歴史教材唱歌』新編唱歌集 明治42年
194	東京盲聾学校校歌「うれしき御代」	中村 秋香	小山 作之助	明治22年
195	東京市 桜田小学校	加藤 松吉	小山 作之助	大正10年 現 御成門小学校

196	東京市 上六尋常小学校	中村 秋香	小山 作之助	現 九段小学校
197	東京陸軍幼年学校 校歌	第25期生	小山 作之助	
198	東京府立第三高等女学校校歌	千家 尊福	小山 作之助	現 都立駒場高校
199	富山県工芸学校 校歌	友田 宜剛	小山 作之助	現高岡工芸高校 明治27年富山県最古の校歌
200	東京市鞆絵(ともえ)小学校校歌	中村 秋香	小山 作之助	明治25年頃
201	長岡高等女学校 校歌	中村 秋香	小山 作之助	長岡大手高校 最初の校歌 明治36年
202	長岡高等女学校 創立記念の歌	中村 秋香	小山 作之助	長岡大手高校 明治37年
203	長岡高等女学校 済美会歌	中村 秋香	小山 作之助	長岡大手高校生徒会歌 明治37年
204	二宮先生 報徳唱歌			明治34年
205	女訓		小山 作之助	『おもかげ』
206	春の心	佐佐木信綱	小山 作之助	
207	廣瀬中佐	福澤 悦三郎	小山 作之助	『戦時唱歌』第三編
208	北海道歌	藤沢 古雪	小山 作之助	明治37年
209	僕は軍人大好きよ	水谷まさる	小山 作之助	ポリドールレコード(原曲=日本海軍)
210	三重県女子師範学校「朝雲高し神路山」	佐々木信綱	小山 作之助	1908年
211	明治文典唱歌	大和田 建樹	小山 作之助	宇和島東高校同窓会HP
212	明治の御代	阪 正臣	小山 作之助	大正2年 新編唱歌集 明治42年
213	やっつけろ		小山 作之助	
214	夕立	古関 義雄	小山 作之助	
215	雪	旗野十一郎	本元子	音楽雑誌
216	我等は中学一年生		小山 作之助	中学唱歌

(3) 校歌及び史料など

① 作曲した校歌(現在確認分)

	都道府県	当時の学校・校歌名	現在の校名	作詞	制作年	HP	現校歌
1	北海道	庁立札幌第一中学校 校歌	道立札幌南高等学校	大和田建樹	明治38(1905)年		
2	岩手	水沢尋常高等小学校 校歌	奥州市立水沢小学校	畠山 健	明治35(1902)年	○	○
3	千葉	成田幼稚園(旧園歌「み寺のやま」)	成田幼稚園	大和田建樹		◎	
4	東京	府立第三高等女学校 校歌	都立駒場高等学校	千家 尊福		○	○
5	東京	青山尋常高等小学校 校歌	港区立青山小学校	中村 秋香		○	○
6	東京	浅草小学校 校歌	台東区立浅草小学校	大和田建樹	明治30(1897)年	○	
7	東京	公立中和小学校 校歌	墨田区立中和小学校	中村 秋香	明治34(1901)年	◎	○
8	東京	小学常磐学校 校歌	中央区立常磐小学校	中村 秋香	明治28(1895)年	◎	○
9	東京	番町尋常高等小学校 校歌	千代田区立番町小学校	中村 秋香	明治35(1902)年	○	
10	東京	富士見尋常高等小学校 校歌	千代田区立富士見小学校	中村 秋香	明治27(1894)年	○	
11	東京	公立櫻川尋常高等小学校 校歌	(港区立御成門小学校に統合)	佐々木信綱		△	
12	東京	公立小学校桜田学校 校歌	(港区立御成門小学校に統合)	加藤 松吉	大正10(1921)年	△	
13	東京	公立芝区鞆絵尋常小学校 校歌	(港区立御成門小学校に統合)	中村 秋香	明治25(1892)年		
14	東京	上六尋常小学校 校歌	千代田区立九段小学校	中村 秋香			
15	東京	東京盲聾学校校歌「うれしき御代」	筑波大学附属視覚特別支援学校・聴覚特別支援学校	中村 秋香	明治22(1889)年	◎	
16	東京	東京陸軍幼年学校 校歌		第25期生			
17	新潟	県立長岡高等女学校 校歌	県立長岡大手高等学校	中村 秋香	明治36(1903)年	◎	
18	新潟	安塚村立中川尋常高等小学校 校歌	(安塚小学校へ統合)	相馬 御風	大正13(1924)年		
19	新潟	長岡市四郎丸尋常高等小学校 校歌	長岡市立四郎丸小学校	遠山 運平	大正12(1923)年	○	○
20	長野	松本尋常高等小学校校歌「校訓の歌」	松本市立開智小学校	浅井 洌	明治31(1898)年	◎	○
21	長野	県立飯田高等女学校 校歌	県 飯田風越高等学校	伊澤 修二	明治42(1909)年	◎	○
22	富山	県立富山県工芸学校 校歌	県立高岡工芸高等学校	友田宜剛			
23	三重	三重県女子師範学校校歌「朝雲高し神路山」	(三重大学教育学部)	佐々木信綱	明治41(1908)年		
24	兵庫	親和高等女学校	親和中学校・親和女子高等学校	佐藤 八重	大正6(1917)年	◎	○
25	福岡	九州電気工学校	九州電気専門学校	降矢 芳郎	昭和5(1930)年		○
26	中国	大連小学校 共通校歌		大和田 建樹	明治41(1908)年		

・HPはホームページの略 ・◎は歌詞・音源あり ・○は歌詞の掲載あり ・△は港区教育委員会HP

② 長野県立飯田風越高校（飯田高等女学校）校歌と作之助の書簡



飯田風越高等学校校歌

作詞 一番 伊澤修二
二番 中川雅子

作曲 小山作之助

一
赤石岳のみね高く
天龍川の水清し
伊那の靈気のすぐれしは
山と川とに顕れぬ

二
風越山を仰ぎみて
高き理想を抱きつつ
大空翔けゆく風となり
明日の世界を拓きゆく

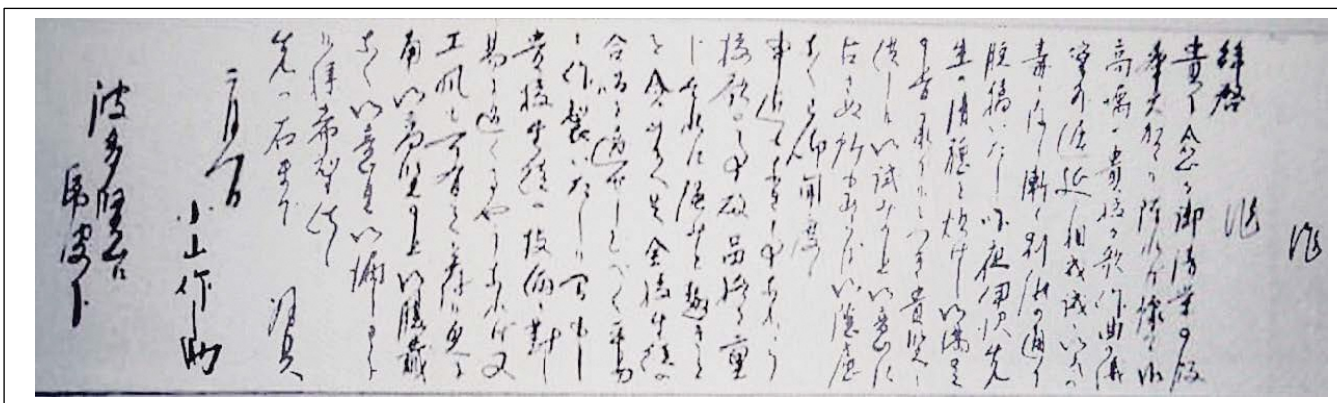
旧校歌（歌詞）は五番までであった。
二番が戦後改訂され、現在は二番
までが歌われている。

飯田風越高校は明治 34（1901）年下伊那郡立高等女学校として創立、明治 42（1909）年に県立移管され飯田高等女学校となり校歌が制定されました。当時の校歌（旧校歌）は 5 番まであり、通常は 1 番だけ、2 番まで歌う時は 5 番を歌いました。

この歌詞は、高校の男女共学化により見直しが懸案となり、平成 13（2001）年、創立 100 年を機に歌詞 2 番の公募が行われ、同校卒業生による新しい歌詞が決定されました。現在は新校歌として、従来の 1 番と新しい歌詞の 2 番が歌われています。

なお、旧校歌（現在の 1 番）の作詞者は、伊那市高遠町出身の伊澤修二（1851～1917）です。同氏は東京師範学校、東京音楽学校等の校長を歴任し、在職中には自ら唱歌集をつくるなど、西洋音楽の普及に努めました。また、小山作之助の師として知られ、両者は生涯を通して親交を深めました。この校歌は、「日本音楽教育の父・母」と称される伊澤と小山による貴重な作品になっています。

・ 作之助の書簡（飯田風越高校所蔵）



作（作之助の作か？）
 作（右に同じ 後筆力）
 拝啓
 貴下愈々御清栄の段
 奉大賀候 陳れば 豫々御
 高囀の貴校々歌 作曲の儀
 案外遅延ニ相成 誠ニ御氣の
 毒ニ存候 漸く別紙の通り
 脱稿いたし 昨夜伊沢先
 生の清聴を煩はし 御満足
 の旨承り候ニつき 貴覽ニ
 供し候 御試みの上 御意に
 召さぬ所もあらば 御隠慮
 なく被仰聞度候
 申込もなき事ながら
 校歌の事故 品格を重
 じ それに強みと趣きと
 を含め候へ共 全校生徒の
 合唱に適せしむべく平易
 ニ作製いたし候間 もし
 貴校生徒の技倆ニ對し
 易に過ぐるやうなれば 又

作（作之助の作ではないか？）
 作（右に同じ あとで書かれたようです）
 はいけい
 きか いやいよ ごせいえいのだん
 たいがたてまつりそうろう のぶれば かねがね おん
 こうたのみの きこうこうか さつきよくのぎ
 あんがい ちえんにあいなり まことに おきの
 どくにぞんじそうろう ようやく べっしのとおり
 だっこういたし さくや いさわせん
 せい の せいちようを わずらわし ごまんぞく
 のむね うけたまわりそうろうにつき きらんに
 きようしそうろう おんころみのうえ ぎよいに
 めさぬところもあらば ごいんりよ
 なく おおせきかさられたくそうろう
 もうすまでもなきことながら
 こうかのことゆえ ひんかくをおもん
 じ それにつよみとおもむきと
 をふくめそうらえども ぜんこうせいとの
 がつしように てきせしむべく へいに
 に さくせいいたしそうろうあいだ、もし
 きこうせいとの ぎりようにたいし
 やすきにすくるようならば また



これは飯田風越高等学校に残る校歌の楽譜送付時に同封された作之助の書簡です。

この内容は校歌の作曲が遅れたこと、ようやく脱稿して伊澤先生に聞いていただき御満足されたので貴覽に供したこと、試作中なので、意に召さぬところあれば隠さず聞かせて欲しいこと、校歌なので品格を重んじ、それに強みと趣きとを含めたが、全校生徒の合唱に適するように平易に作製したので、もし貴校生徒の技倆に対して易に過ぎれば工夫もするので、とにかく腹蔵なく意見を聞かせて欲しいと記しています。

同校では、令和6(2024)年3月の後期終業式の校長講話で、この書簡の内容が紹介され、「今日の離任式には心をこめて歌いたいと思います」と話をまとめられました。(令和6年3月「校長通信」) なお、この書簡は、封筒・楽譜とともに学校の宝として大切に保管されています。このたび、小山作之助生誕160周年記念事業に際して、同校から写真の提供をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。

工風も可有之と存候 兎に
 角御高覧の上 御腹蔵
 なく御意見御漏し被下
 候様希望仕候
 先ハ右まで 拝具
 二月一日
 波多賢台 小山作之助
 虎皮下

くふうも これあるべくと
 ぞんじそうろう とに
 かく ごこうらんのうえ ごふくぞう
 なく ごいけんおもしろくだされ
 そうろうよう きぼうつかまりそうろう
 まずは みぎまで
 二月一日
 波多 けんだい 小山作之助
 こひか

③ 長野県松本市立開智小学校校歌



写真（「旧開智学校」）は松本まると博物館ホームページより転載

この校歌は、明治 31（1898）年に制定されました。当時の校名は、松本尋常高等小学校で、校舎は国宝「旧開智小学校」（左の写真）を使用しました。

この学校は明治 6（1873）年「学制」発布による開智学校の開設に始まり、その後の改名、他校との統合を経て、現在は松本市立開智小学校となっています。同校では明治期以来の校歌である「校訓の歌」が、現在も歌い継がれています。なお、今回の調査で「旧開智学校」及び現在の「開智小学校」には、作之助の関連史料を残念ながら発見できませんでした。

<p>四、 愛正剛に かたどりし 校旗は高く なびくなり あおげ あおげ その光 みがけ みがけ その心</p>	<p>三、 撓（たわ）まず枯れず雪の中に 松の翠（みどり）ぞ 秀でたる 嵐烈しき 冬の日に 春待つ色こそ 尊とけれ</p>	<p>二、 裏表なき 富士の嶺（ね）は み空に高く聳（そび）えたり 人の心も かくてこそ 正しきものと 仰がるれ</p>	<p>一、 藪しもわかぬ 天つ日の 光あまねき 影見ても 世の人みなは 隔てなく 愛しむこそ よろしけれ</p>	<p>校歌「校訓の歌」 作詞 浅井 洌 作曲 小山作之助</p>
--	---	--	--	--

④ 長岡市立四郎丸小学校校歌

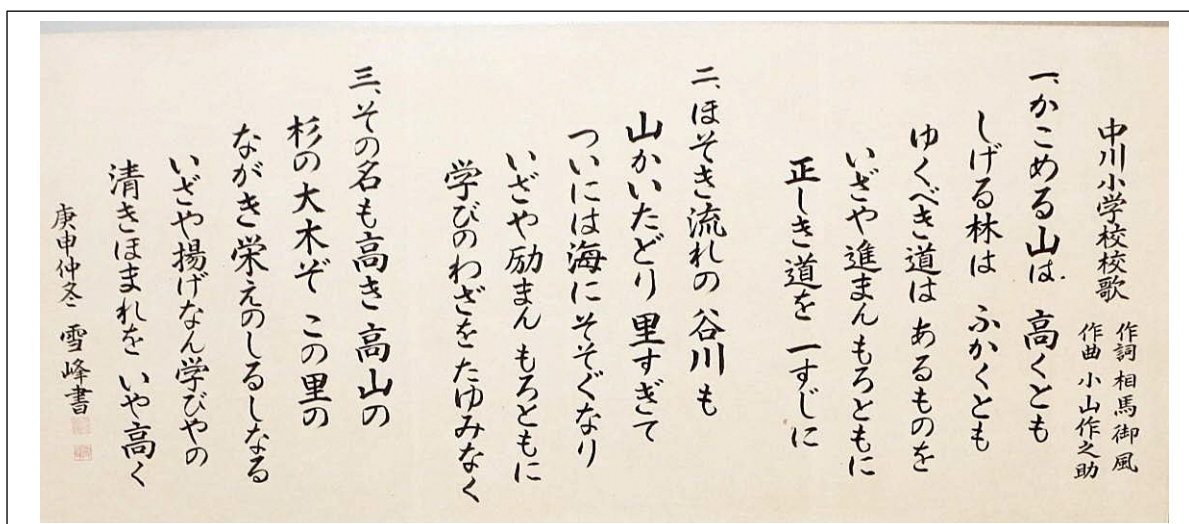


<p>大長岡の 東の方を 背負いて立てる 四郎丸 文化の幸を 身にうけて 我等が行手 希望ぞあふる</p>	<p>峻峯鋸 蒼柴の緑 朝夕仰ぐ 四郎丸 自然の幸に 恵まれて 我まなびやに 光ぞあふる</p>	<p>校歌 作詞 遠山 運平 作曲 小山作之助</p>
---	--	-------------------------------------

この校歌は、明治 42（1909）年 5 月 25 日に制定されました。作詞の遠山運平は、明治 17（1884）年北魚沼郡蕨生（ひう）村（現在の小千谷市蕨生）に生まれました。新潟師範学校入学頃から短歌を始め、卒業後は下保倉小などの勤務を経て、大正 5（1916）年三島郡西越小学校校長になりました。

退職後は「越佐新報」の歌壇選者となり、昭和 49（1974）年 91 歳で生涯を閉じました。校歌制作の経緯は不明ですが、作詞者・作曲者が新潟県人であり親しみを持って、現在も四郎丸小学校の校歌として子供たちに歌い継がれています。

⑤ 東頸城郡安塚町立中川小学校（現在の上越市安塚区安塚小学校に統合）校歌



旧中川小学校校舎に残る校歌額

旧安塚町立中川小学校は、明治7年(1874)年に第42番小学区坊金校として開校し、その後、明治25(1892)年中川村立中川尋常小学校、町村合併で明治41(1908)年安塚村立中川尋常小学校となりました。

戦時期の昭和16(1941)年に坊金国民学校と改称しましたが、昭和30(1955)年、安塚町立中川小学校となり、平成5(1993)年に閉校し、安塚小学校に統合となりました。

校歌は、大正13(1924)年に制定されましたが、その経緯の詳細は不明です。作詞者の相馬御風は多くの校歌・楽曲を作詞しましたが、小山作之助との作品は、「中川小学校校歌」と、その2年前に制作した「瀧町青年團歌」の2曲だけが確認されています。この校歌は、平成26(2014)年7月21日、小山作之助生誕150周年記念「第12回卯の花音楽祭」において、「卯の花合唱団」により久しぶりに歌われました。(現在、まちづくり大瀧ホームページにて、視聴可能です。)この2人の著名な作者による名曲は、いつまでも歌い継がれてほしいものです。

3 新たに確認したこと

(1) 故郷とのつながり

① 絵はがきの発見（米沢の上杉神社から潟町の親族へ）

明治時代！
絵はがき発見！

大変めずらしい「小山作之助直筆のはがき」が発見されました。提供していただいたのは安澤さん（潟町）で、自宅の仏壇から出てきたそうです。はがきの宛先の「内藤武八郎」は安澤さんの曾祖父にあたります。内藤武八郎と小山作之助の関係は不明ですが、旅先から絵はがきを送るほど、懇意にしていたようです。



安澤さん（左）から小山作之助直筆のはがきを寄付していただきました

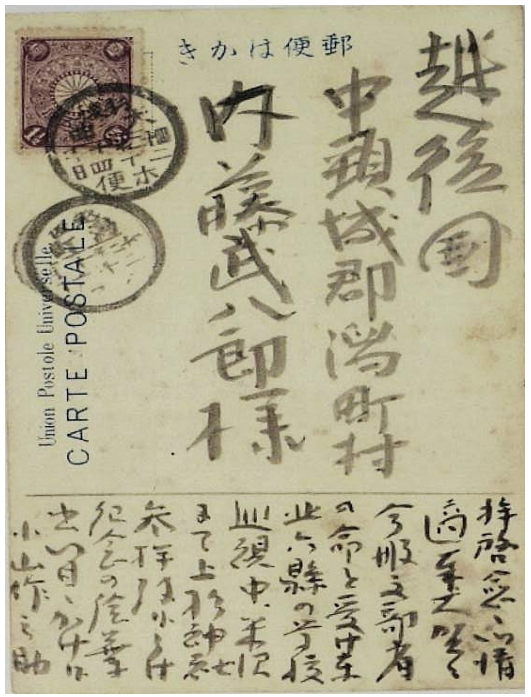
小山作之助の直筆のはがきが発見されました。提供していただいたのは安澤さん（潟町）で、自宅の仏壇から出てきたそうです。はがきの宛先の「内藤武八郎」は安澤さんの曾祖父にあたります。内藤武八郎と小山作之助の関係は不明ですが、旅先から絵はがきを送るほど、懇意にしていたようです。

はがきの内容は、文部省の命を受け、東北6県の学校巡視中に米沢の上杉神社を参拝したことが記されています。記念に購入した絵はがきで郵送されました。

当時小山作之助は小学校唱歌教科書編纂委員でしたので、その関係で学校視察をしていたと思われる。

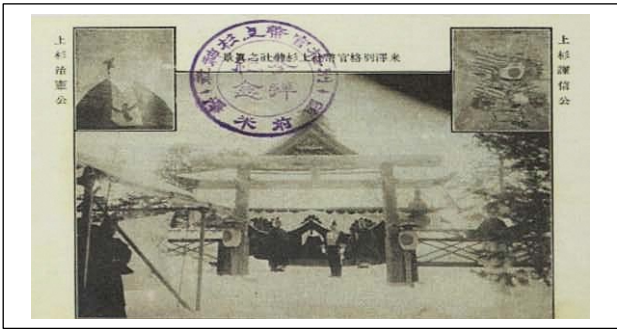
（広報「まちづくり大潟」令和3年5月25日号）

拝啓 愈々御清
適奉大賀候
今般文部省
の命を受け 東
北六縣の学校
巡視中、米沢
まで上杉神社
参拝致候ニ付
紀年の絵は葉
書御目ニかけ候
小山作之助



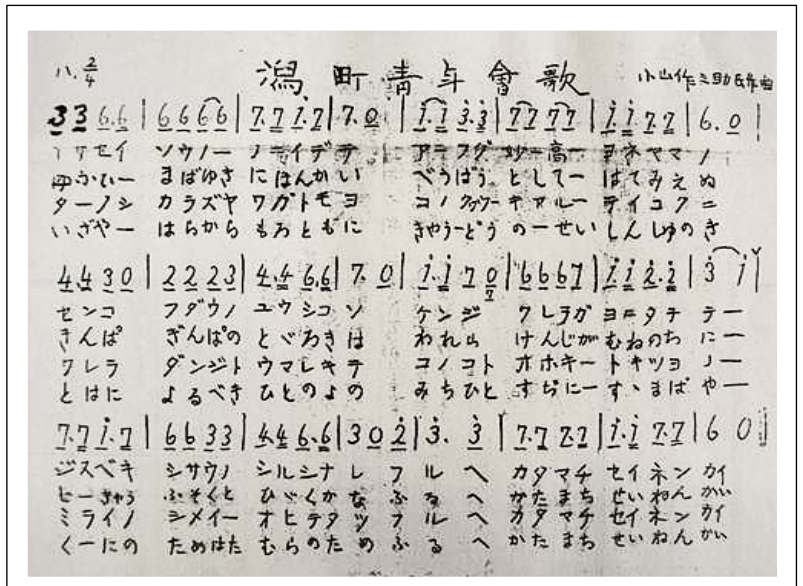
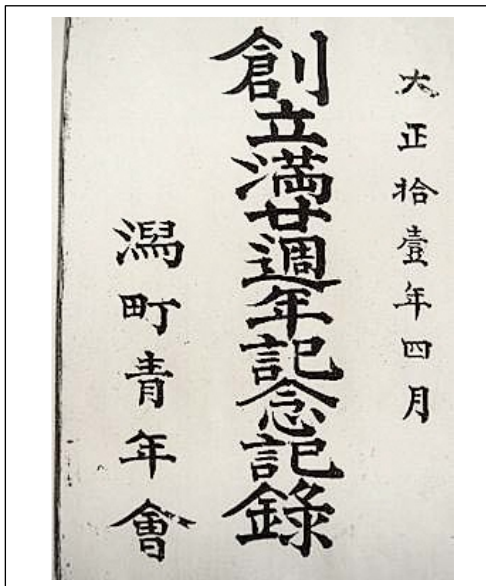
はいけい いよいよ ごせい
てき たいがたてまつりそうろう
こんばん もんぶしょう
のめいをうけ とう
ほくろつげんのがつこう
じゅんしちゅう よねざわ
まで うえずぎじんじゃ
さんばいいたしそうろうにつき
きねんの えはが
き おめにかけそうろう
こやま さくのすけ

裏面



この絵葉書は作之助が文部省の仕事で東北6県の学校を巡視中、米沢の上杉神社を参拝した時に投函されたものです。寄贈者の安澤氏からは、宛名が曾祖父の内藤武八郎氏であること、同様に次頁『音楽グラフ』掲載の内藤眞守氏も親族であるとお伺いしました。この絵葉書の発見は、地元との密接なつながりを表す貴重な史料になりました。（絵葉書は「小山作之助記念資料館室」所蔵・展示中）

④ 「潟町青年会（團）歌」について



大正 11 (1922) 年 4 月 30 日、潟町青年会結成 20 周年事業として、講演会開催、会旗と会歌の制定が行われました。潟町公民館所蔵の「大正拾壹年四月 創立満廿周年記念記録 潟町青年會」の綴り(写真上左)には事業に関する記録が残り、「潟町青年会歌の数字譜」(写真上右)、「作之助の書簡」(別掲)も貼付されています。その記録によると会歌制定の動きは、前年の 2 月に始まり、潟町校訓導高橋右左武郎氏を以って糸魚川の相馬御風に歌詞を依頼すると、同年 4 月 22 日、歌詞が高橋氏宛に贈られて来ました。この御風からの書簡は現在も残ります。このとき歌詞は「青年團歌」になっていましたが、書簡文面には「青年會諸氏へ」と記しており、御風は意図して「團歌」の語を用いました。なお、青年会による「團歌」から「會歌」への歌詞変更は、式典当日までに御風から了解を得たのでしょう。「創立満廿周年記念記録」綴には「青年會歌」の表記に統一されています。

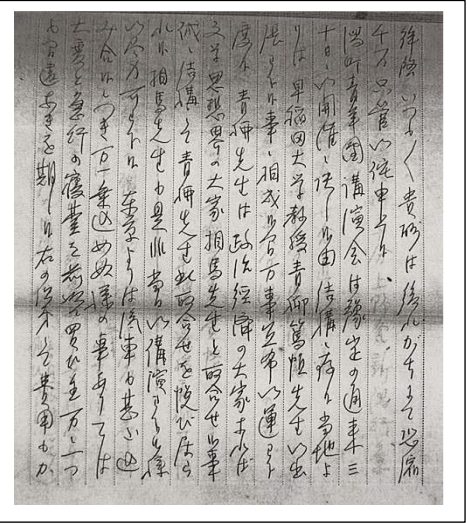
一方、作曲は同年 4 月 23 日、青年会会長の内藤雄次氏を以って小山作之助に依頼を行い、翌年の大正 11 年 4 月 21 日、同氏宛に曲譜が到着しました。この記念事業に関する作之助の青年会への協力は惜しみないものでした。先立つ 2 月 5 日、同会長は作之助宛に講演会開催と講師斡旋の希望を書面で依頼すると、4 月 19 日に作之助から講演 30 日開催と講師決定の連絡が届きました。(作之助の書簡参照)

当日 4 月 30 日の式典は潟町小学校を会場にして、御風ほか県知事代理、村内有力者など来賓と会員 40 名が出席と「高田日報」は報じています。御風は来賓として挨拶し、講演は早稲田大学青柳篤恒教授が「極東の変局と帝国青年の覚悟」と題して熱弁を奮いました。式典終了後、会員は来賓と御風を見送り、会旗を先頭に会歌を合唱して作之助宅に向かい、同氏の母に御礼を述べて再び会歌を合唱しました。その後、村社神明宮にて会歌合唱、万歳三唱をして午後 8 時 5 分に解散になりました。この式典以後、青年会歌は代々の会員に引き継がれて、現在も地元の皆さんに歌い継がれています。

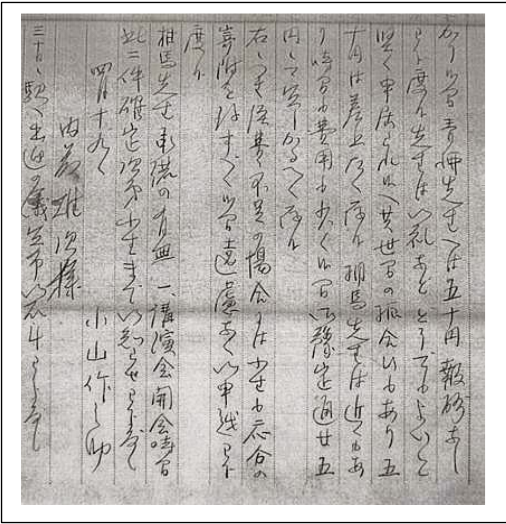
(作之助の書簡について)

4 月 19 日付、小山作之助の書簡は青年会創立記念事業に際して、青柳教授への配慮、御風への礼金などをきめ細かく記しています。青柳教授には急行の寝台切符を用意し、朝食などの心配もしています。報酬は青柳教授に 50 円、御風は予定通り 25 円を差し上げたいが、礼金の経費不足の場合には自分が応分の寄附をすると申し出ています。なお、青年会から作之助への謝礼金の記録はありません。逆にこの事業に対して、作之助は 15 円の寄付を行いました。(大正後期の 1 円は現在の 2,500~4,000 円程度)

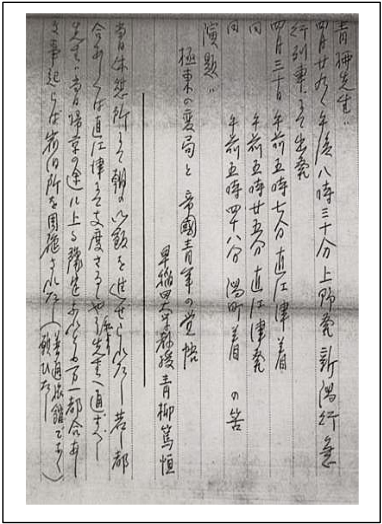
①



②



③



①

拝啓 いつもく貴酬は後れがちにて恐縮
 千万 只管御侘申上候
 湯町青年団講演会は豫定の通 来三
 十日二御開催ニ決し候由 結構ニ存候 当地よ
 りは早稲田大学教授青柳篤恒先生御出
 張被下候事ニ相成候間 万事宜敷御運被下
 度候 青柳先生は政治経済の大家なれば
 文学思想界の大家相馬先生と取合せ候事
 誠ニ結構ニて 青柳先生此取合せを悦び居ら
 れ候 相馬先生も是非当日御講演被下候様
 御尽力可被下候 東京よりは汽車も甚だ込
 み合候二つき 万一乗込めぬ様の事ありては
 大変と急行の寝台を前以て買ひ置 万二一つ
 も間違なきを期し候 右の次第ニて費用もか

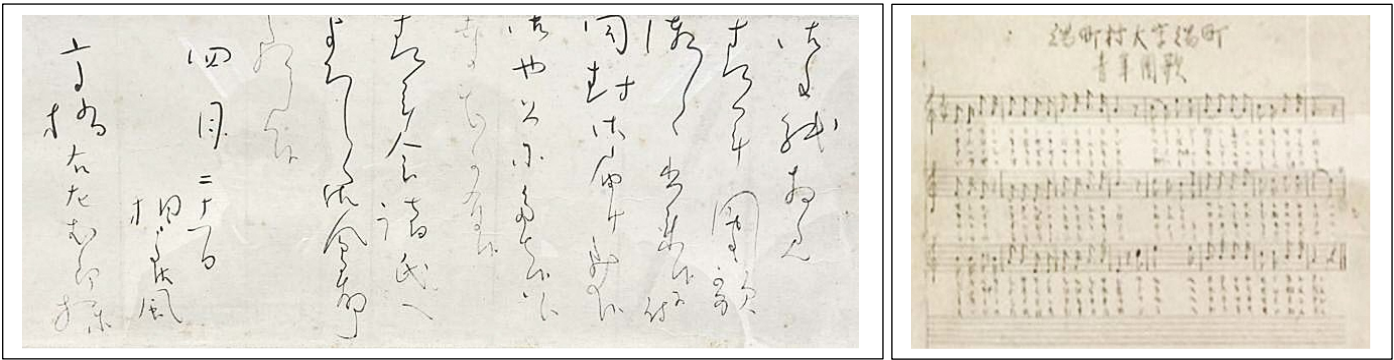
②

かり候間 青柳先生へは五十円報酬なし
 被下度候 先生は御礼などどうでもよいと
 堅く申居られ候へ共 世間の振合ひもあり五
 十円は差上たく存候 相馬先生は近くもあ
 り 時間も費用も少く候間 御豫定通廿五
 円ニて宜しかるべく存候
 右二つき経費不足の場合には小生も応分の
 寄附を致すべく候間 遠慮なく御申越被下
 度候
 一、相馬先生承諾の有無 一、講演会開会時間
 此二件確定次第小生まで御知らせ被下度候
 四月十九日 小山作之助
 内藤 雄次 様
 三十日、駅へ出迎えの儀 宜敷御取斗被下度候

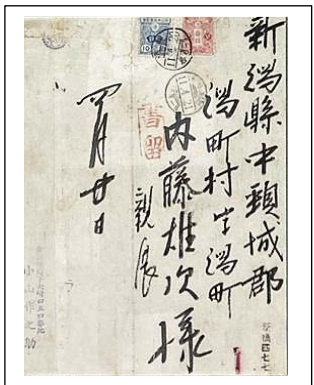
③

青柳先生ハ
 四月廿九日午後八時三十分上野発新潟行急
 行列車にて出発
 四月三十日 午前五時七分直江津着
 同 午前五時廿五分直江津発
 同 午前五時四十八分湯町着の筈
 演題ハ 極東の変局と帝國青年の覚悟
 早稲田大学教授 青柳篤恒
 当日休憩所にて朝の御飯を進ぜられたし 若し都
 合あしき事起らば宿泊所を周旋されたし (普通旅
 館でなく願ひたし)
 へ通ずべし
 先生ハ当日帰京の途に上る豫定なれとも 万一都
 合あしき事起らば宿泊所を周旋されたし (普通旅
 館でなく願ひたし)

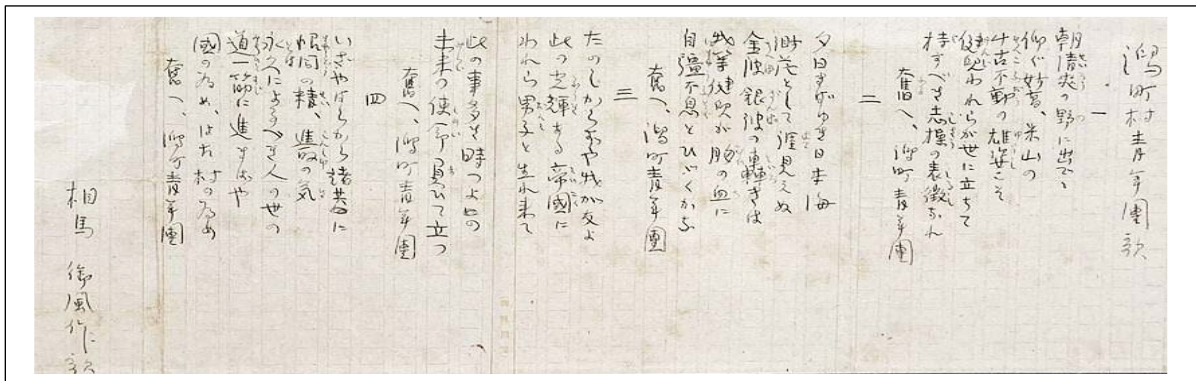
〔(「瀧町青年会(團)歌送付)〕に関する相馬御風書簡 瀧町町内会所蔵



(おてがみはいけん)
 御手紙拝見
 (せいねんだんか)
 青年團歌
 (ようやくできさそうろうにつき)
 漸く出来候尔付
 (どうふうおとどけいたしそうろう)
 同封御届け致候
 (おやくにたちそうらはば)
 御や久尔多ち候ハッ
 (こうじんにぞんじそうろう)
 幸甚尔存候
 (せいねんかいしよしへ)
 青年会諸氏へ
 (よろしくごほうせい)
 よろしく御鳳聲
 (ねがいあげそうろう)
 願上候
 四月二十一日
 相馬御風
 高橋右左武郎様



〔瀧町青年團歌〕と読み下し文

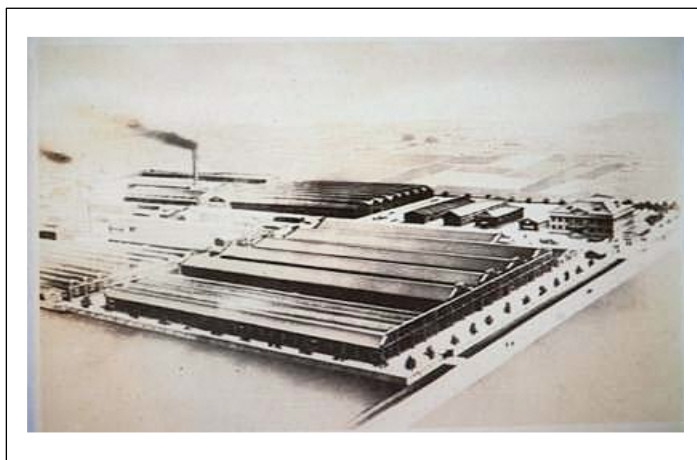


<p>瀧町村青年團歌</p> <p>一 朝清爽の野に出で、 仰ぐ妙高、米山の 千古不動の雄姿こそ 健兒われらが世に立ちて 持すべき志操の表徴なれ</p> <p>奮へ、瀧町青年團</p>	<p>三</p> <p>たのしからずや我が友よ 此の光輝ある帝國に われら男子と生れ来て 此の事多き時つよの 未来の使命負ひて立つ</p> <p>奮へ、瀧町青年團</p> <p>四</p> <p>いざや はらから諸共に 協同の精、進取の気 永久によるべき人の世の 道一筋に進まばや 國の為め、はた村の為め</p> <p>奮へ、瀧町青年團</p> <p>相馬御風 作歌</p>
---	---

(2) 晩年の活躍

① 日本楽器製造株式会社（現：ヤマハ㈱）における活躍

明治 22 (1889) 年、山葉寅楠は山葉風琴（オルガン）製造所を設立、明治 30 (1897) 年日本楽器製造株式会社に改組します。大正 5 (1916) 年、寅楠死後は元内務省官僚の天野千代丸が 2 代目社長となり、ピアノ製造部門は山葉直吉ら一族が担当しました。大正 15 (1926) 年、経営難と労働環境の悪さから大規模な労働争議が発生するも組合側の敗北に終わりました。この争議後、昭和 2 (1927) 年 1 月天野社長は辞任し、株式会社住友電線製造所（現：住友電気工業㈱）取締役の川上嘉市を 3 代目社長に迎えました。彼は住友財閥の支援を受けて会社の合理化と技術革新で再建を果たし、戦時期は陸軍機「隼」などの軍需品製作で乗り切りました。その後も川上一族が経営を続け、昭和 25 (1950) 年、川上源一（嘉市の息子）が 4 代目社長となり、事業拡大を図って昭和 30 (1955) 年オートバイなどのヤマハ発動機㈱を分社しました。その後も順調に発展を続け、昭和 62 (1987) 年「ヤマハ株式会社」に改名、現在も国内のみならず世界の企業「YAMAHA」として、創業の地である静岡県浜松市に本社を置いて躍進を続けています。



左「日本楽器（工場全景）」、右「日本楽器」（いずれも昭和 5 年頃 浜松市文化遺産デジタルアーカイブから転載）
(日本楽器製造株式会社と小山作之助の関係について)

明治 36 年に第五回内国勸業博覧会が大阪で開催された時、楽器類審査官を担当したのが村岡範為馳と山葉寅楠、小山作之助でした。このとき寅楠が作之助の鑑識眼の非凡さに敬服して同社の顧問に招聘し、作之助も国産で良質な楽器提供の必要性を認識し同社顧問に就任しました。その後、作之助は東京・浜松間を毎週往復して社員指導のみならず、大正 11 (1922) 年からは株主総会で監査役に就任して亡くなるまで重役 10 人の中の 1 人として、経営難に苦しみ労働争議に揺れる会社を支え続けた陰の功労者でした。

(会社の危機と作之助の活動)

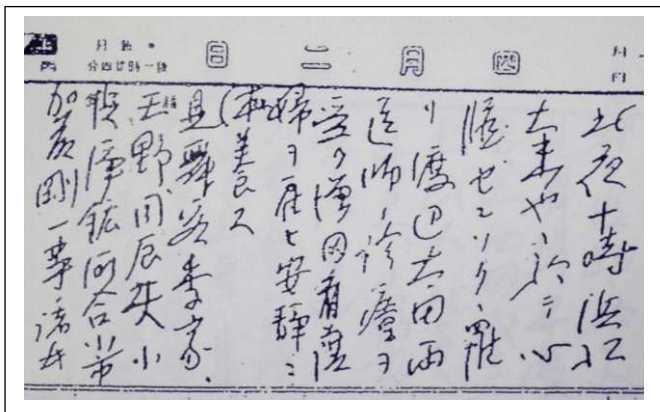
大正 15 (1926) 年 4 月、日本楽器製造株式会社で労働争議が発生しました。1,300 人の従業員が、各種手当、待遇改善を会社に要求しますが、拒否されストライキに突入、元内務省官僚の天野社長は警察、右翼団体を使い、組合側を強硬な姿勢で弾圧しました。その結果、8 月に関係者逮捕、争議団の解散となり組合側の惨敗に終わりました。この時期、会社は山葉寅楠による事業多角化の失敗、後任の天野社長時代には本社工場の火災、関東大震災発生などで経営は危機状態でした。このため、三井系の箕輪焉三郎を専務に迎え建て直しを図りますが、社長と専務が対立し経営は好転しませんでした。さらに労働争議後は経営陣の対立が激化し、ようやく昭和 2 (1927) 年 1 月に取締役会が改革実施を決議し、住友電線取締役の川上嘉市が社長就任後は住友資本による本格的な立て直しが進められました。この時期、作之助は役職の監査役以上の働きを見せました。労働争議期の作之助の動きは不明ですが、横浜、大阪の各工場職員や労使双方からも信頼されていた様子が残存する資料からうかがえます。また、経営危機に瀕した社長の交代劇には、敵対しあう両陣営から信頼された作之助の行動と決断が会社の方向性を決めました。

(作之助の急逝とその影響)

一方、頻繁な東京・浜松間往復は作之助の体に負担がかかり、同年（昭和2（1927）年）の4月2日浜松で心臓発作を起こしました。以後21日間の休養を取りましたが、その後、再び多忙な日々に戻り、間もなく、6月27日の急逝に至りました。作之助の死は会社に大きな影響をもたらしました。

川上新社長体制がスタートすると、作之助との絆でつながった人々が会社を去りました。技術者では河合小市（株河合楽器製作所創業者）、山葉直吉（N.YAMAHA 製造）、大橋幡岩（大橋ピアノ製造）、中谷孝男（調律師）らが会社を離れました。会社は多大な功労者である作之助に対して慰労金5千円の授与を重役会で決定しました。川上新体制のもと作之助がその後も生きていれば、会社の恩人として現在のヤマハにもその功績は伝えられていたでしょう。

(a) (昭和2年4月2日の日記) 浜松にて体調を崩した様子が記されています。

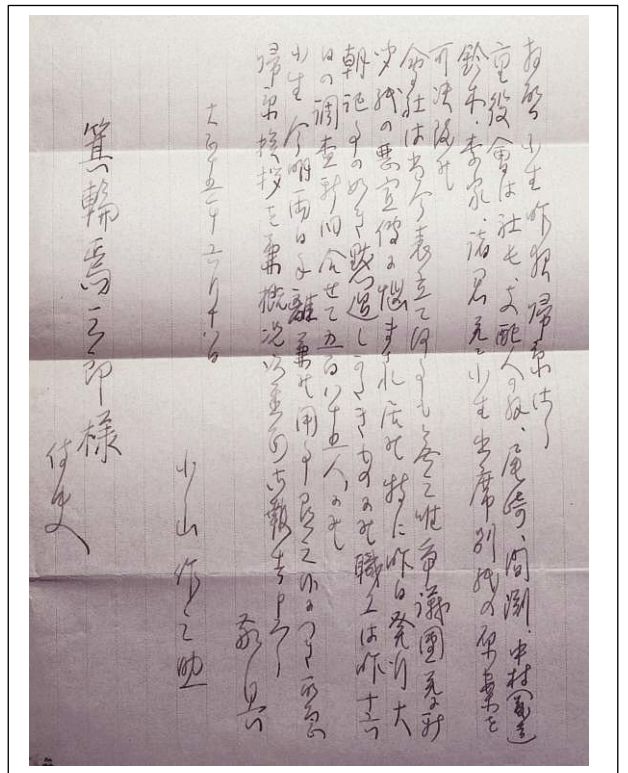


昨夜十時 浜松
大来やニ於テ心
臓ゼンソクニ陥
リ渡辺太田両
醫師ノ診察ヲ
受ク 増田看護
婦ヲ雇ヒ安靜ニ
休養ス
見舞客 李家
天野 同辰雄 小
浜浄鉞 河合小市
加藤剛一等諸氏
〔昭和二年 日記〕

(b) (「(作之助の書簡)」「箕輪家文書」沼津市明治史料館所蔵)

日本楽器で発生した労働争議の対応に苦慮する重役会の様子が窺えます。

拜啓 小生昨夜帰京仕候
重役會は、社長、支配人の為、尾崎、間淵、中村（藤吉）
鈴木、李家、諸君并ニ小生出席 別紙の原案を
可決致候
会社は当今表立であるも無之 唯争議団并尔新
聞紙の悪宣傳尔悩まされ居候 特に昨日発行 大
朝記事の如き 黙過しかたきもの尔候 職工は昨十六
日の調査 新旧合せて五百八十五人尔候
小生 今朝両日と離兼候用事有之候尔つき 取急
帰京挨拶を兼 概況以書面 御報告申上候
敬 具
大正十五年六月十八日
小山作之助
箕輪焉三郎 様
侍史



② 雑誌『音楽グラフ』の編集・出版

大正 12 (1923) 年「音楽グラフ」は、音楽界の出来事を写真や絵画を使って報道することを目的として、銀座培風館から月刊雑誌として出版されました。初刊の頃は好評でしたが間もなく売上げが伸びず、発行者は苦境に陥り続刊の目算が立たない有様となりました。この雑誌を作之助が引き継ぐのは、大正 14 (1925) 年 1 月号の第三巻第一号からでした。音楽グラフ社の住所は「東京市外下大崎四五四、電話高輪二六五九番」で、作之助の自宅でした。編集作業の様子は『おもかげ』に「原稿締切期限が来ると決って二・三日は徹夜が続く。そして先生自身の執筆の区切り区切りには社員の筆になった原稿や又寄書の類を総て仔細に点検し、一字一句の末に至る迄、或は校訂し或は加除し修正し内容の整頓に全力を注ぐ」と描かれています。経営状況も「全く超世間的と答ふれば最も適切と思ふ」と記しています。作之助急逝後は子息の敏氏が引き継ぎ、追悼文を掲載した昭和 2 年「八月號」、「九月號」が発刊されました。(写真の『音楽グラフ』は「小山作之助記念資料館室」所蔵・展示中) 残念ながら、その後の発行状況は不明となっています。



「音楽グラフ」社(自宅)前の
小山作之助

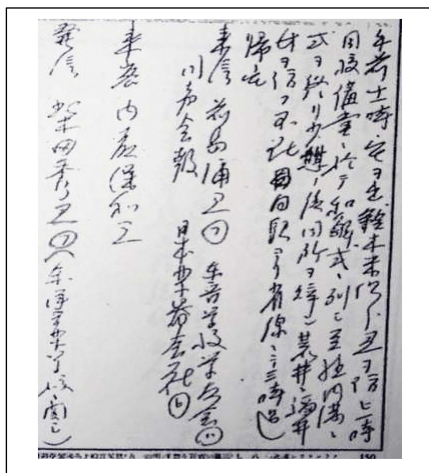
③ 私立音楽学校への援助

小山作之助は、私立音楽学校の援助に多忙な時間を割いて取り組みました。

東洋音楽学校(現在の東京音楽大学)は、明治 40 (1907) 年、作之助同様に伊澤修二の指導を受けた鈴木米次郎によって創立されました。昭和 2 (1927) 年、活発化した労働運動の影響を受けて、同校でも学校側と対立が激化した学生によるストライキが何度か発生しました。鈴木は学生との対話に応じましたが、本格的な解決に向けて間に入ったのが作之助でした。

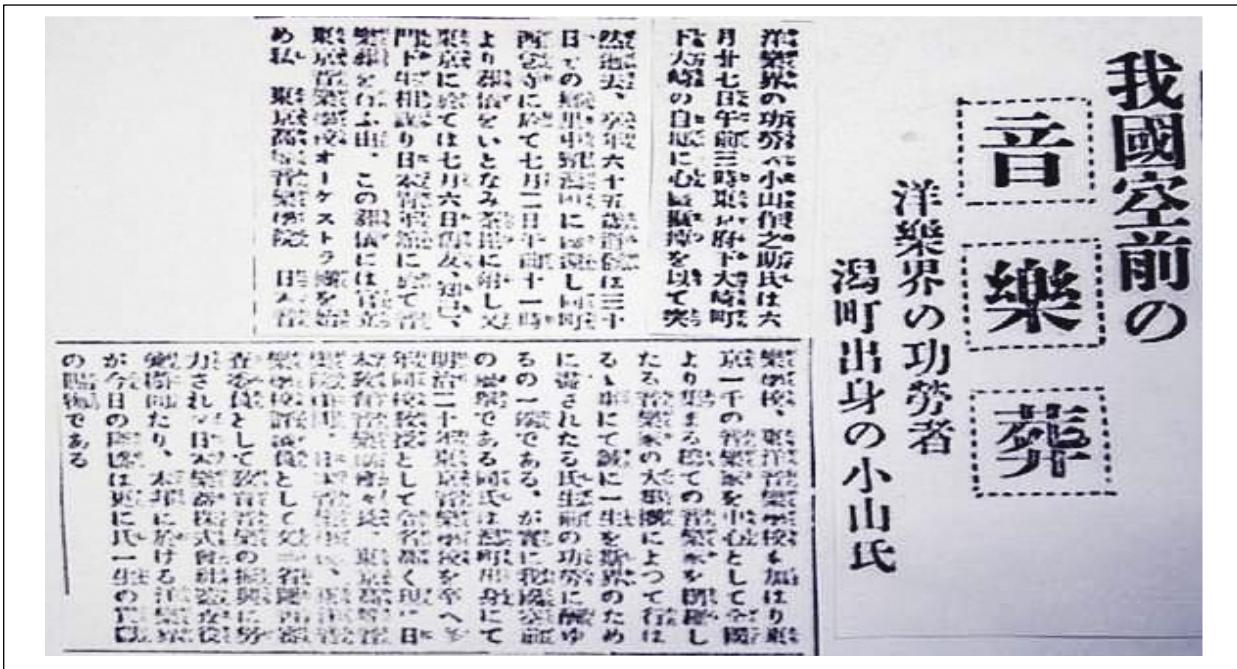
彼の「日記」には、5 月 21 日「鈴木米次郎君を訪れ、同校後援につき協議・・・」、22 日「午後 2 時半鈴木米次郎君を訪れ種々打合せをなし、5 時頃同校生生徒詰所を訪れ、実行委員と会談、暫時中席再度面談 7 時頃鈴木氏を再び訪れ・・・」24 日「午前 11 時宅を出、鈴木米次郎君を訪い、1 時同校講堂に於て和解式に列し至極円満に式を終わり・・・」、26 日、鈴木米次郎君、東洋音楽学校生徒総代五人が作之助宅訪問、6 月は 11 日、21 日、鈴木米次郎君、東洋音楽学校生徒総代五人が作之助宅訪問など数多くの折衝機会を記しています。作之助の急逝は 6 月 27 日であり、この 5 月から 6 月の難題解決への心労は、彼の健康に大きな影響を与えました。

「昭和二年日記」 5 月 24 日記事



午前十一時宅ヲ出 鈴木米次郎君ヲ訪ヒ 一時
同校講堂ニ於テ和解式ニ列シ至極円満ニ
式ヲ終リ 小憩ノ後同所ヲ辞シ 荒井ニ福井
氏ヲ訪フ 不在同駅ヨリ省線ニテ三時過
帰宅
来信 前島弥君フ 東音学校校友会ハ
同声会報 日本楽器会社 ヒ
来客 内藤保和君
発信 柴田秀君フ(東洋音楽学校ニ関シ)

④ 小山作之助の急逝



地元「高田新聞」の記事（上越市立高田図書館所蔵）昭和2年6月30日記事

『音楽グラフ』掲載の作之助への弔文)

昭和2年8月号・9月号の『音楽グラフ』は、楽壇関係者の作之助への弔文を掲載しました。

ここに、作之助と関係が深かった日本楽器関係者二人の弔文（抜粋）を紹介します。

川口章吾「工場での先生」

「会社の人たちは上下を通じて或時は「小山先生」と呼び又或時は小山の「親爺さん」と称して居た。「小山の親爺さん」は毎月一回乃至（ないし）は二回位僕の居た当時は顧問であられた浜松へやって来て、無言で工場を一巡して行くだけであったが、不思議な事には、社長でも折々手こずる様な技師でも、又は都会の空気を吸った新しい社員でも、さては職工長などでも「小山の親爺さん」に対しては一種の尊敬と親しみの念を懐（いだ）いて居た。・・・先生は如何なる人に対しても同じ心もちで接し、如何なる場合にあってても正邪の差異を明らかに示して居られた。現今楽器会社の主要な地位にある人々で、先生の垂訓を受けぬ者は一人も無いと云っても過言ではないと思はれる。」

中谷孝男（調律師・YMO細野晴臣氏の母方の祖父）

「故先生は私にとって廿（二十）年来変らぬ「先生」であった。私共は実際、先生以外に先生と云う言葉を余り使はなかった。・・・先生の見解は演奏と製作の实地に跨（またが）っていて、到底誰れも齒の立つものはない。それだけ貢献は大きかった。・・・私にとって十数年も前、浜松の旅館の一室に二人の青二才を前に「音とは何にか」と説かれた先生と今春中野の学校の調律科のことで、彼の池の見える書齋で、いろいろと話された先生の温顔とは、常にいろいろと御指導下されたことと共に、少しも変わっていなかった。・・・先生に親しく御指導を仰ぐことは既に再び出来なくなったが、先生の精神は我が楽器界にも儼然（げんぜん）として残っている。勿論私とても、それに浴する席末の一人なのである。」

4 今後に向けて

(1) 新たな調査について

No.	曲 目	作詞者	備 考
1	海	不詳	文部省小学唱歌 5年
2	四季の雨	不詳	文部省小学唱歌 6年
3	大塔宮	不詳	文部省小学唱歌 5年
4	茂れる森	友田 宜剛	重音唱歌集第一集 明治37年
5	秋の野	今泉 定介	〃
6	雪戦	旗野 十一郎	〃
7	炉辺	友田 宜剛	〃
8	深夜の都会	佐佐木 信綱	〃
9	夢	旗野 十一郎	〃
10	老木の椿	佐佐木 信綱	重音唱歌集第二集 明治37年
11	探梅	渡辺 文雄	〃
12	春の祝	東宮 鐵眞呂	〃
13	郭公	不詳	〃
14	秋	不詳	〃
15	初冬読書	不詳	〃
16	白玉	不詳	〃
17	燈台	旗野 十一郎	〃
18	送別歌	不詳	〃
19	老渡子	佐佐木 信綱	〃

未確定曲について、1「海」以外にも作之助の曲と推定されるものを掲げてみました。

2「四季の雨」は、作之助の伝記『おもかげ』の巻末解説に、上笙一郎が「海」とこの曲を作之助作品と明確に記しています。以前はこの説が有力でしたが、近年は異説もあらわれて現在は微妙な状況です。

3 文部省尋常唱歌「大塔宮」(5年生)は、現在まで作詞・作曲者に関する情報・通説は皆無です。ここに掲出したのは、「音楽グラフ」昭和2年8月号の弔文特集にて、作之助の師にあたり、唱歌作曲委員の一人であった上眞行の「小山作之助君を哭す」の文に注目しました。そこには「・・又國定唱歌に掲げられたる〇〇〇の一曲の如き寥々たる短編ながら、君の曲材が異常の光を放って居て、眞に超群の名作である。・・」と記されています。ここでは、「国定唱歌(文部省尋常小学唱歌)」、「〇〇〇の3文字」、「寥々(りょうりょう)たる短編」のキーワードで、尋常小学唱歌120曲(作曲者確定曲を除く)をさぐると、この曲がかなりの確率で合致しそうです。

4~9の小山作之助編『重音唱歌集』第一集、10~19の第二集の曲は、作者自ら不詳を希望すると本文を記しています。ここに作之助自身の曲が含まれていても不思議はないようです。

伝記『おもかげ』によると、いまだ推敲を要するものやむを得ず出す時は「大抵「作曲者未詳」「作歌者未詳」「無名氏」等の擬名に依って発表するのが例で、前記の小学唱歌、忠勇軍歌、國教唱歌、新撰國民唱歌丈でも、その例が相当多いやうだ」としています。また、「本元子」のペンネームは知られていますが、「先生のペンネームは其の他にもあるやうだが、その方は滅多に使用していないらしい」と記しています。このように、作之助の作品探しは、相当に難航しますが今後も継続して取り組みます。

(2) 調査・研究の課題

今回のパネル展示は、小山作之助の晩年の活動の一端を紹介しました。その主な情報源は平成 15 (2003) 年、生誕 140 周年に小山家から寄贈された「昭和 2 年日記」です。この日記には亡くなるまでの半年間の活動、人間関係などの非常に有益な情報が入っています。今回は調査不足で紹介できなかったテーマを以下に略記します。

・私立音楽学校への助力（「武蔵野音楽学校」、「東京高等音楽学院」など）

「日記」には、作之助宅の訪問者が記されています。音楽家で最も多いのが半年間に 11 回訪問の福井直秋です。同氏は昭和 4 (1929) 年に「武蔵野音楽学校」（現在の武蔵野音楽大学）を設立しました。彼は作之助を生涯の師と仰いで多くの指導を受けましたが、この時期の交流内容を確認できませんでした。

一方、作之助は「東京高等音楽学院」（現在の国立音楽大学）の設立と発展に尽力しました。同校は大正 15 (1926) 年、現在の新宿区四谷の仮校舎で開校、11 月に国立大学町に移転しました。初代学院長は渡邊敢、理事には中館耕蔵など作之助と親交ある人々が役員を務めました。「日記」には、渡邊氏が昭和 2 年 1 月 8 日帝国ホテルで欧州帰朝披露会を催し、同氏不在の穴埋めを任された作之助も出席、3 月 5 日、6 月 6 日にも作之助宅を訪問した記録があります。中館氏も 1 月 2 日、2 月 16 日作之助宅を訪問、生前最後の訪問客は 6 月 26 日の同氏でした。また、前述の（作之助への弔文）調律師中谷孝男は 1 月 17 日、3 月 4 日に作之助宅を訪問、同時期には同校に調律科を設けるように指導・助言を受けています。戦後、中谷氏は作之助の意志を果して関連学科の設立及び同校講師を勤めました。今回は、これらの人々との交流を含め、作之助が初期の「東京高等音楽学院」に果たした役割を明らかにできませんでした。

・日本音楽教育協会ほかの活動

大正 11 (1922) 年、この組織は音楽教育の発展と向上を目的に作之助の提唱で成立し、自ら初代会長を務めました。「日記」には 6 月 13 日南（青）山師範で理事会に出席、午後 11 時 50 分前に帰宅とあります。没後もしばらく会長職に名前がありました。また、作之助は大正 6 (1917) 年、文部省検定教科用図書調査委員に就任、「日記」には 6 月 10 日、信時潔著「標準楽曲教科書」の内閲で同氏の訪問を受け、13 日に調査済教科書を返送とあります。また、大正 7 (1918) 年から小学校唱歌作曲委員となりました。ほぼ毎月会議があり最後の出席は 5 月 14 日と記されています。これらの組織の活動を含めて、文部省関係の仕事についても不明です。

(3) 資料収集活動と研究調査活動のまとめ

生誕 160 周年記念事業として、令和 6 年度は再び資料収集活動を行いました。特に日本楽器製造株式会社（現：ヤマハ㈱）と作之助の関係に着目して調査を行いました。その結果、同社に対する尽力と貢献、信頼された人間関係などを把握できました。作之助は献身的な姿勢で仕事に打ち込み、人間関係を大切に、他人にはきめ細やかなやさしきで接しました。性格的に自己宣伝や派手な振舞いを嫌ったため、散在する資料が検索にかからない傾向にあります。このため、継続的な資料収集及び調査こそが、作之助の偉大な功績を発見し、さらなる顕彰事業の発展に寄与するものと実感しています。

現在、作之助に関する資料は第二次大戦下の戦災（東京、浜松空襲など）により、そのほとんどが失われています。このため収集はきわめて困難となっていますが、今後も継続して資料の収集に努めます。

また、晩年まで作之助は地元潟町との結びつきが強く、ハガキ・書簡のやりとりを数多く行っていました。（『昭和 2 年日記』の記述から）ご自宅に未調査の郵便などが眠っていましたら、大潟コミュニティプラザ内まちづくり大潟または市教育・文化グループまでお知らせください。ご協力をよろしくお願い致します。

おわりに

生誕 160 周年記念事業の完了にあたり、特記すべき成果と今後の課題を記します。

(1) 飯田風越高校に残る校歌に関する作之助の書簡

資料収集を進める上で、何よりも作之助の一次史料の発見が重要です。情報収集はネット検索、文献調査、研究関係機関や校歌作曲校への電話調査を行いました。同校からは即座に書簡の情報提供があり、学校の宝としての所蔵が伝えられました。これを読むと作之助の校歌制作に臨む過程が描かれ極めて興味深いものです。作詞は作之助の師である伊澤修二（同校近郊の伊那市高遠町出身）であり、作曲は同氏の依頼によるものでした。この 2 人の作品は校内試行を経て完成し、現在も大切に歌い継がれています。

現在、作之助が作曲した校歌は 26 曲を確認しています。今後も未確認校歌の探索とともに書簡等の一次史料の発見にむけて調査継続の必要があります。

(2) 日本楽器製造株式会社と作之助の果たした役割について

日本楽器製造株式会社（現：ヤマハ㈱）と作之助の関係は、楽器に関する技術指導を含めた音楽顧問としての専門的役割と捉えられ、日本楽器製造株式会社『社史』（1977 年）等においても彼の功績等は記されていません。ところが、「昭和 2 年日記」には頻繁な浜松・東京間の往復、重役会への出席、役員との頻繁な連絡が記述されています。この時期は、同社にとって最大の経営危機を迎え、あわせて大規模な労働争議の発生など、その対応に経営陣は忙殺されます。今回の沼津市明治史料館が所蔵する箕輪家文書「(日本楽器関係資料)」の調査によって、作之助が同社の危機の渦中に巻き込まれ、同社を支え、復活に繋ぐ重要な役割を果たしたことが確認できました。今後は調査研究を深めて、同社に対して作之助の貢献をアピールする働きが重要と考えられます。

(3) 新たに確認できた楽曲

『資料収集報告書 夏は来ぬ』は、162 曲の作之助作品を掲載しています。今回の調査では、追加分として 54 曲（計 216 曲）を新たに確認しました。これらの調査方法は、国立国会図書館を主としたネット上のデータ提供によるものです。とくに同図書館の資料配信は年々増加し、充実した内容になっています。あわせて、YouTube などの楽曲配信は、曲調の確認を容易にしました。今後も引き続き調査を継続します。

(4) 「卯の花音楽祭」について

平成 15 (2003) 年、開始された「卯の花音楽祭」は、令和 6 (2024) 年には、生誕 160 周年記念事業としても位置付けて節目の第 20 回が開催されました。毎回の豪華なゲストと多くの出演者による開催に祝意を表し、あわせて運営を支える関係者に敬意を表します。下の表は第 1 回～令和 7 年の第 21 回までの音楽祭における作之助作品の発表曲を記しました。この表から「夏は来ぬ」以外では「吉野山」7 回、「漁業の歌」6 回、「鏡が浦の驟雨」と「海」3 回、「川中島」など 2 回が 3 曲、「秋景色」など 1 回が 4 曲、曲別では 12 曲が発表されました。現在（令和 7 年度）、作之助作品は 216 曲を確認しています。今後、この音楽祭が新たに発掘された多くの作品の発表・鑑賞の場となることを期待します。

今後もこれらの成果と課題を踏まえながら、生誕 170 周年、生誕 180 周年に向けて、調査・研究・顕彰活動などに取り組んでまいります。

回	曲名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	合計	
1	夏は来ぬ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	21
2	吉野山	○	○	○	○							○	○									○		7
3	漁業の歌	○	○	○							○	○										○		6
4	鏡が浦の驟雨				○						○								○					3
5	海						○										○						○	3
6	夏	○		○																				2
7	川中島														○				○					2
8	湖町青年会会歌			○										○										2
9	中川小校歌													○										1
10	四郎丸小校歌													○										1
11	開智小校歌	○																						1
12	秋景色																			○				1

(3) 小山作之助生誕 160 周年記念フェスタ

小山作之助の生誕 160 周年を記念し、その遺徳を偲び、功績を顕彰することを目的に令和 7 年 2 月 23 日(日)に記念フェスタを実施しました。

当日は 162 名の来場者があり、記念講演や小山作之助作曲の楽曲解説のほか、ゲスト演奏や地元合唱団による合唱を披露いただき、来場者の皆様からは「記念講演は初めて聞く話ばかりで、作之助について深く知ることができました」、「ゲストの生の歌声がすばらしく、感動しました」、などの声がありました。



記念講演 (杉田 玄 氏※)

※小山作之助の弟(直次郎)のご令孫
医師、樹下美術館館長



楽曲解説 (後藤 丹 氏※)

※上越教育大学名誉教授(作曲家、編曲家)
上越市民の歌、市内高校校歌など多数作曲



ゲスト演奏

(梅澤ゆきの氏、ピアノ：高橋雅代氏)



地元合唱団(コーラスおおがた)の合唱



小山作之助作曲「夏は来ぬ」の全員合唱



(4) 小山作之助に関する広報活動

小山作之助の功績を称え、その生涯などを振り返ることで郷土の偉人の魅力を再認識するとともに、次世代へ受け継ぐための広報活動に取り組みました。

①のぼり旗・看板設置

犀潟駅など大潟区内 10 か所に「のぼり旗」を設置したほか、令和 6 年 10 月開催の「えちご・くびき野 100 キロマラソン」大潟区のエイドに立て看板を置き「夏は来ぬ」のメロディーを流し、県内外のランナーへ PR しました。



②広報上越での周知、リーフレットの大潟区全戸配付

広報上越（令和 6 年 12 月号）にて特集ページを掲載、また小山作之助に関するリーフレットを大潟区全戸（約 3,300 部）配付し、市民へ PR しました。



③上越妙高駅開業 10 周年記念イベント 出展

市主催の上記イベント（令和 7 年 3 月）に際し、発車メロディー（夏は来ぬ）の作曲者である小山作之助の PR ブース設置や地元合唱団による「夏は来ぬ」の合唱を行いました。



令和7年度 事業実績（「日本音楽教育の母」小山作之助顕彰事業実行委員会）

(1) 小山作之助に関する広報活動

実行委員会の名称を変更し、生誕160周年記念事業のアフター事業として位置付けた令和7年度は広報活動と資料編纂をメイン事業として掲げました。

①第21回卯の花音楽祭

これまで調査収集した資料や小山作之助年表等を卯の花音楽祭会場に展示して広報活動を行いました。



②小山作之助記念資料室 タペストリー新調

既存のタペストリーが劣化していたため、内容を一新したうえで、新たなタペストリーを新調しました。



左は内容を一新し新調したもの※
右はこれまで掲示していたもの
※令和7年8月更新

③前島密生誕190周年を祝う会 出展

小山作之助の後妻が前島密の養女であった縁から、上記イベント（令和7年9月）にてPRブースを設置しました。来場者には両者が親族であったことをご存知の方もおられました。



前島密と小山作之助の意外な関係性

1907年(明治40年)10月、小山作之助は再婚(前妻とは9年前に死別)しますが、そのお相手が前島家の養女であった小西マツさんでした。

日本女子大学の前身校出身で、教職経験がある才媛だったマツさんを妻に迎えたことにより、同じ郷土の偉人であった両者は実は親族関係でもあったのです。

五反田にあった前島家の邸宅(右奥はマツ)

④イベント給食及びパネル展

小山作之助の生誕日（1864年1月19日（旧暦：文久3年12月11日））を記念し、令和7年1月19日（月）に大潟町小学校・大潟町中学校でイベント給食を実施するとともに、同日から1月末まで大潟コミュニティプラザにてパネル展を開催し、小山作之助生誕160周年記念フェスタの映像も期間限定で上映しました。

イベント給食でテレビ取材を受けた児童は「小山作之助は地元の出身で「夏は来ぬ」の作曲者であることを知っていた」、「有名な音楽家（瀧廉太郎など）を育てた先生なのでもっと多くの人に知ってもらいたい」、などの声がありました。

また、まちづくり大潟との連携事業で卵の花の苗木を育てており、今後配布・PRする準備をしています。



イベント給食の写真



子どもたちの様子（5年2組）



パネル展と観客の様子



卵の花の苗木育成の様子

今後の活動について

「日本音楽教育の母」小山作之助顕彰事業実行委員会は令和7年度末でひとまず、活動を休止します。

小山作之助生誕160周年記念事業を通して、市民や関係者から寄せられた多くの声や思いは、実行委員会にとって何よりの励み・収穫となり、それらの期待のお気持ちは次の170周年、180周年事業へと受け継がれるべき財産であります。

よって、次回の生誕170周年事業に向けて、何を目指すべきかを今から関係者で話し合いながら、少しずつ準備を始めたいと考えています。

例えば、今後の事業においては、より広範囲で多様な媒体を用いた情報発信や、国際的な視野を取り入れた調査や催しも一つの手法であり、小山作之助の日本音楽教育への情熱が社会の発展にどう波及・貢献したのか、そして未来にどう活かしていけるのかを市民やさまざまな人の協力を得て、探求してまいります。

今後の展開にどうかご期待ください。

お世話になった機関や施設名一覧。ご協力ありがとうございました。

国立国会図書館、長野県飯田風越高等学校、国宝旧開智学校（松本市立博物館）、沼津市明治史料館、長岡市立中央図書館、長野県立図書館、上越市立歴史博物館、上越市立高田図書館、上越音楽教育研究会、潟町町内会、まちづくり大潟、大潟地区公民館、大潟町小学校、大潟町中学校、諏訪地区公民館、安塚区教育・文化グループ

この報告書は『資料収集報告書 夏は来ぬ』を主たる参考文献にしました。本文の出典、参考文献は文中に記載しました。その他の情報は、国立国会図書館の公開データ、関係各機関などのホームページを利用して入手しました。（本文執筆 川上 達也）

※画像類は著作権者の承認を得たものであり、無断転載は一切禁じます。

令和8年3月20日 発行

編 集・発 行

「日本音楽教育の母」小山作之助顕彰事業実行委員会
（小山作之助160周年記念事業実行委員会）